

九州地域地質センターの 未公表資料が語る戦中戦後史

吉井守正¹⁾

はじめに

我が国だけでも310万人の戦没者を出した第2次世界大戦も末期になった1945年3月に、地質調査所九州地域地質センターの歴史は、さかのぼる(第1図)。

敗色の濃くなった戦況に伴い、当時の軍需省地質調査所は、機構の一部を東京都京橋区木挽町(現在の中央区銀座7丁目16番, 新橋演舞場の近く)から全国の数ヵ所に疎開させた。疎開先のひとつが熊本県山鹿市で、そこに同センターの前身である山鹿分室が開設された。初代の所長は、のちに東北大学教授となった河野義禮氏である。

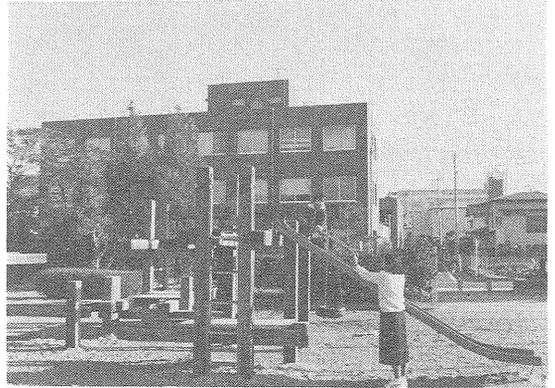
同年5月25日に本所の建物は、アメリカ軍のB29爆撃機による空襲で焼失した。焼け跡から回収された7万5千分の1「天草」地質図幅の1枚が、縁が焦げたままの姿で、九州地域地質センターの標本室に現在も展示されている。

さて1986年、九州地域地質センターに着任した筆者は、若い頃の北海道支所と仙台駐在員事務所での勤務経験を活かして、同センターを旧来の「出先機関」的イメージから「研究機関」へ積極的に脱皮させる方策を考えた。

そもそも地質調査所など地学に関する研究機関は、活動の舞台が主として野外だから、研究対象となる現地の近くに立地すれば有利であることは申すまでもない。

地質調査所には部課という「縦糸」のほかに、グループと呼ばれる研究テーマ別の「横糸」の研究体制がある。したがって地域地質センターは、本所の研究グループ(横糸)と連係し、センターの利点をフルに活用すれば、本所ではできない、きめ細かな研究が可能となる。センターは組織が小規模なので、運営面で小回りが利くのも、本所にはない大きな長所である。

もちろん地元の研究機関などとの研究交流も、地の利を活かして本所以上に緊密となり得る。本所の側も、各センターとの連係により、遠隔地での研究成果や情報が



第1図 九州地域地質センターの建物
福岡市南部の塩原(しおばる)中央公園に隣接している。

入手・総合できる。つまり本所と同センターは一体のシステムで、相互補完の関係にある。

このような体制を維持・発展させるのは極めて簡単で、本所幹部の指導力、同研究員のプロ意識、およびセンター所長のごく標準的な力量、これだけで十分と考える。本所・センター・地元が「三方一両得」となるような研究テーマは、現に沢山ある。

さて筆者は、せっかく赴任したからには何かひと仕事しようと、九州地域地質センターの研究環境整備の方策に構想をめぐらした。その結果、自らの力で短期間に実現可能な仕事として、次のような事柄を立案した。

すなわち、古い研究備品類の廃棄・更新と実験室などの改修、未公表研究資料の整理と公開、そして地元「名物」になっている岡本鉱物標本の整理などである。資料や標本については、その資産を利活用して、外部との積極的な研究情報の交流を図ろうとするものである。

今回は、未公表資料の整理にまつわる、言わば奮戦記と、その資料から読み取った九州地域地質センターでの調査研究の歴史的変遷について述べてみよう。

1) 地質調査所鉱物資源部

キーワード：九州地域地質センター

1. 茶封筒の山

きっかけは単純なものだった。ある晩筆者は、福岡市内の小さな飲み屋で、元九州出張所長の原田種成（はらだ・たねあき）氏と歓談していた。そのときの同氏の言葉が筆者に重大なヒントを与えた。

「図書室に沢山ある未公表の調査資料を今のうち整理せんと、何も分からんこととなりますばい。私が時々出かけて整理しても、よかと思ひますばい。」

（なるほど！）

その夜筆者は、寝ながら考えた。

（資料整理の仕事は原田さんにアルバイトの形でやっていただく。原田さんは九州駐在員事務所時代以来の故事来歴を熟知しておられるし、標本室の設計を見ても、物を整理するセンスを持っておられるので適任だ。予算的には何とかしよう。）

各種鉱山の大半が閉鎖された今日、鉱床に関するデータは、もはや貴重品である。埋もれているこれらの鉱物資源に関する資料を公開するのは、地質調査所としての責務とも思われる。気短かな性格の筆者は早速原田氏に打診した。こうして資料整理の大作戦が緒についた。

まず実態調査に乗り出した。問題の資料は図書室のスタックランナ1基の片面を占め、多数のファイルに収められていた。各ファイルには茶封筒入りの資料が、はち切れんばかりに詰め込まれており、まさにひと財産の感がある。

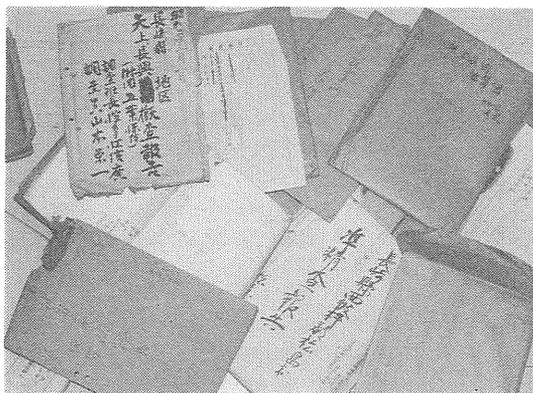
ところが調べてみると、ファイルに書かれている文字と中身とが食い違っている場合も少なくなかった。とにかくこのままでは、資料の検索・利用は、ほぼ不可能な状態にあった。

2. 走りながら考える

資料の大部分は1940年代の後半、すなわち世界大戦直後に作られた地下資源調査報告書である。当時は物資が不足し、印刷・出版は思うにまかせなかった。更半紙に謄写印刷されたものは、まだましな方で、大部分は手書きで、せいぜい数部がカーボン複写されただけであった（第2図）。

資料の数が約600点にのぼることは整理が進むに従って判明した。褐色に変色した更半紙に謄写印刷された資料も多数あり、これらはページを開いただけで破れてしまいそうなボロボロの状態で、いわゆる酸性紙問題そのものであった。

そこで、資料は電子コピーしたものを公開・利用する



第2図 整理前の「古文書」

ことにした。コピーした地質図などは場合により色鉛筆で彩色する必要もあった。膨大な資料の整理は根気のいる長丁場である。したがって原田氏には、月に10日以内のマイペースで、作業してもらうことにした。

資料整理の仕事は、筆者にとっても未体験である。予想される資料の多様性を思えば、アタマの中だけで完璧な計画が立つ訳がない。一応のアイデアが浮かんだら、とにかくやってみて、不都合が生じたら適宜軌道修正すればよい。つまり「走りながら考える」方式が最善と考えた。

この種の作業は、手間ばかりかかって研究成果としては認められない。そこで原則的に若手研究員らには手伝わせず、原田氏と筆者とで、やり通すことにした。

3. 分類法の考案

資料整理に当たって、まず問題なのが資料を収納するファイルのサイズと材質、それに書棚での配列順である。資料のほとんどがB5判なので、ファイルはひと回り大きいA4判と決めた。資料のサイズを統一するのは整理の第一歩である。文具業者から取り寄せた見本品を比較検討の結果、ファイル同士の滑りがよく、書棚での出し入れに便利なプラスチック製を選んだ。

資料を内容別に整然と配架するには分類番号が必要である。そこで本所地質情報センターから、図書の日本十進分類法（NDC）のテキストを送ってもらい、それを参考に独自の分類法を作った。

NDCによれば地学関係は55の数字から始まる。今回対象となる資料は、ほとんどが地学関係なので、55は省略し、その後続く数字を百の位とする3桁の数字で分類した。（ちなみに地学以外の分野は990とした。）

例えば鉱床関係はNDCで553だから300台となる。鉱

第1表 対象別コード

000	地理, 地形, 地形図			
030	地球物理			
040	地球化学, 地化学探査			
100	地学全般, 一般地質, 地方地質誌, 地質図幅, 土地分類図			
170	層序, 地史, 地質構造			
200	岩石学全般, 岩石成因, プレート, 隕石			
230	火成岩, 火山, 火山岩, 火山碎屑物			
240	堆積岩			
250	変成岩			
300	鉱床, 地下資源全般 (鉱種の分類は鉱業法に準拠)			
310	金属鉱物			
311	金, 銀	312 銅	313 鉛, 亜鉛	314 鉄, (含銅) 硫化鉄
315	マンガン	316 クロム	317 錫	318 蒼鉛, アンチモン
319	水銀	320 タングステン, モリブデン	321 砒素	
322	ニッケル, コバルト	329 その他の金属		
330	非金属鉱物			
331	磷	332 黒鉛	333 石膏	334 重晶石 335 明礬
336	硫黄	337 螢石	338 石綿	339 石灰石, ドロマイト
340	珪石・珪砂	341 長石	342 蠟石	343 滑石
344	窯業原料, (耐火) 粘土, 陶石, 白土			
345	石材, 碎石, 砂利	349	その他の非金属	
350	エネルギー資源全般			
351	石炭, 亜炭	353 石油, アスファルト	354	天然ガス
355	ウラン, トリウム	356	地熱, 温泉	
370	水資源, 地下水, 工業用水	399	その他の地下資源	
400	応用地質, 土木地質			
500	環境地質, 自然災害, 砂防, 鉱害, 公害			
600	鉱物学, 鉱物記載			
700	古生物, 化石			
990	その他の分野			

分類のルール

1. 鉱種が2種以上にわたる場合は最も若い番号を採用する (例, 銅・鉛・亜鉛鉱床は 312)。
2. 鉱種が手法に優先する (例, マンガン鉱床地域の地化探は 315)。
3. 現象が素材又は対象に優先する (例, 火山災害は 500)。

種に関して NDC は, 込み入っていて分かりにくいので, 独自に2桁の数字を定め, 原則として鉱業法による「法定鉱物」の順序に配列した。この分類番号を「対象別コード」と呼ぶ (第1表)。

対象別コードに続いて, 地域を示す2桁の数字を付けた。これを「地域別コード」という (第2表)。都道府県は自治体コード順に配列したが, 自治体コードのままでは用いなかった。それは, 地方別の大きなくくり (例えば九州地方は90) と, それに属する各県 (例えば福岡は91) を入れ子の関係 (階層構造) にして, 検索の便宜を図りたかったからである。上記2種のコードを総称して「分類コード」と呼ぶことにする。

分類コードの具体例を示すと,

312-90 九州地方の銅鉱床

351-91 福岡県下の石炭鉱床となる。

各資料を上記の分類コード順に配架すれば, 大枠としては NDC 順に, 鉱種は法定鉱物順に, 同種の資料は地域別に配列されるので, 検索に便利である。

4. 汚れ仕事

整理作業の流れは, おおむね次のようになる。

- 1) まず1件分の資料を茶封筒から取り出し, 電子コピーして, ホチキスでとじる。
- 2) 新しい角封筒・検索カード・ファイル貼付用ラベルのそれぞれに資料の著者名・標題などを書き写す。
- 3) 資料のコピーと上記のそれぞれに分類コードを回転

第2表 地域別コード

00 世界（又は地域に無関係）	01 外国（国名不明）					
02 アジア	03 ヨーロッパ	04 アフリカ	05 南北アメリカ	06 オセアニア		
07 南・北極	08 宇宙					
10 日本全土						
20 北海道・東北						
21 北海道	22 青森	23 岩手	24 宮城	25 秋田	26 山形	27 福島
30 関東						
31 茨城	32 栃木	33 群馬	34 埼玉	35 千葉	36 東京	37 神奈川
40 北陸						
41 新潟	42 富山	43 石川	44 福井			
50 東海・中部						
51 山梨	52 長野	53 岐阜	54 静岡	55 愛知	56 三重	
60 近畿						
61 滋賀	62 京都	63 大阪	64 兵庫	65 奈良	66 和歌山	
70 中国						
71 鳥取	72 島根	73 岡山	74 広島	75 山口		
80 四国						
81 徳島	82 香川	83 愛媛	84 高知			
90 九州・沖縄						
91 福岡	92 佐賀	93 長崎	94 熊本	95 大分	96 宮崎	97 鹿児島
99 不明・その他						

ゴム印で押す。

- 4) 資料のコピーをその角封筒に入れる。
- 5) 資料をファイルに納める。分類コードが同一の資料は、余裕がある限り、同一ファイルに収容する。
- 6) そのファイルに貼付用ラベルを貼り足す。
- 7) ファイルを分類コード順に配架する。

このように書き出してみると、単純作業の繰り返しで、あとは時間の関数のように感じられる。ところが実際には、ひと筋縄には行かない大変厄介な汚れ仕事であることが、次第に分かってきた。

まず茶封筒は、触れただけで手が真っ黒になるほど汚れきっている。前にも述べた通り、風化寸前の紙も少なくなかった。青焼き複写された資料は、文字や図が薄れていて、うまくコピーできない場合が多かった。和紙に書かれた資料は、コピーすると裏の文字まで写ってしまう。この種のは袋とじされているので、各ページごとに「袋」の中に白紙を差し込んでからコピーした。

資料の分類に悩む場合もあり、一度決めた分類を変更したのも何点かあった。このような事態は予想されていたので、ファイルに貼付するラベルは、剝がせるものを使い、実際には8インチフロッピディスクのラベルを利用した。

著者名・標題などを、封筒や検索カードなど何ヵ所もに書き写さねばならないのは、大変な手間ではある。ワードプロセッサのソフトウェアを用いて、資料の情報を

パーソナルコンピュータに打ち込み、作業の過程で多目的に利用することも考えないではなかった。だが、限られた陣容による作業全体の流れを考慮すると、ひとつひとつ着実に処理できる点で、手書きと言わば古典的な手段の方が、今回の場合は得策と判断した。

作業が完了するまで、かれこれ1年かかった。その間、黙々と根気強く実務に携わった原田氏に、心から感謝している（第3図）。このようにして未公表の報告書類が面目を一新し、図書室に勢ぞろいした（第4図）。

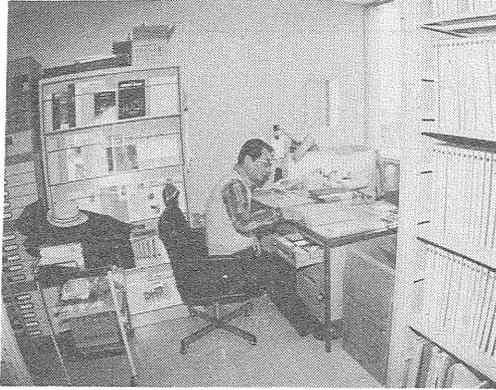
5. 索引作り

配架された資料の索引作りは筆者の仕事である。分類コード・著者名・標題、それにページ数・図表数などの情報をパーソナルコンピュータに打ち込み、このデータをMS-DOSテキストとしてフロッピディスクに収めた。

索引は対象別・地域別・著者別の3種とした。データは分類コード順に入力したので、そのまま対象別索引になる（第5図）。これを基に他の索引を作る。

著者別索引はアルファベット順に配列した。データを入力する際に、著者名の読みをローマ字6字で付け加えておいた。この仕組みを利用してMS-DOSのSORTコマンドで並べ換えれば、厳密ではないけれども、所期の目的は達する。

地域別索引では、同一地域内の資料を対象別に配列す



第3図 整理作業中の原田種成氏



第4図 スタックランナに配架された新装の研究資料
配架したらこの種の資料の利用者が増加した。

ると使い易いと考えた。この並べ換え作業は、筆者が自作した BASIC プログラムで行った。MS-DOS の SORT コマンドでは、同一地域の資料が著者別に配列されるので、都合が悪いからである。

6. 本所オープンファイルへの登録

約 600 点にのぼる報告書の内容は、まさに玉石混交である。出張復命書に毛のはえたような代物や、1 枚の表だけのものから、地質調査所月報の報文としても十分耐える内容の報告までであった。

整理作業の過程で、資料が全所的な利用価値をもつかどうかを、原田氏に判断してもらった。本所の地質調査所研究資料集（オープンファイル）に登録するためであ

る。同氏が選んだものを基本に、最終的には筆者がすべての資料に目を通して調整した。

結局59点を研究資料集に採用する運びとなり、この分は別にコピーを作った。これだけ多数の資料を一時に登録するのは、本所としても前例がなかったが、地質情報センターは製本などの便宜もはかって受理してくれた。

各研究資料集につけられる「登録表」には「内容の紹介」という要約欄がある。この要約欄は筆者が作文した。

地下資源に関する報告の要約には、おおむね次のような内容を盛り込んだ。

- 1) 調査年。
- 2) 位置・交通：JR の最寄り駅からの方向・距離。
- 3) 地質概説：胚胎する鉱床との関係。
- 4) 鉱床：種類・規模・(走向・傾斜)延長・厚さ(幅)。

313. 鉛・亜鉛

- 313-91 WADA,T 和田利雄 (1948) 福岡県河東鉱山鉛・亜鉛鉱床調査報告。通商産業省地質調査所速報, no. 94, 7p., 2図。
 313-93 TOHOAE 東邦亜鉛株式会社対州鉱業所 (1967) 対州鉱業所概要。107p., 67図, 62表。
 313-93 WADA,T 和田利雄 (1947) 長崎県下県郡村佐須村対州鉱山鉛・亜鉛鉱床予察調査報告。商工省地下資源調査所速報, no. 15., 13p., 1図。
 313-96 WADA,T 和田利雄 (1946) 宮崎県見立鉱山調査報告。17p., 1図。

314. 鉄・酸化鉄

- 314-90 SENDO, 千藤忠昌 (1943) 福岡鉱山監督局管内に於ける鉄・水鉛予備調査要約。3p。
 314-91 INOUE, 井上秀雄 (1951) 福岡県内野鉱山調査報告。9p., 2図。
 314-91 KOHIZO 小溝精二 (1944) 福岡県田川郡阿伊田町岩屋鉱山鉄鉱調査報告書。地下資源緊急開発調査報告, no. 3. 12p。
 314-91* KOHIZO 小溝精二 (1944) 福岡県鞍手郡古川村緑山鉱山調査報告書。地調研資, no. 68. 7p。
 314-91 MURAKA 村上 薫・原田種成 (1953) 福岡県粕屋郡和白村奈多海岸に於ける含チタン砂鉄鉱床調査。15p., 2図。
 314-91 HARADA 原田種成 (1953) 福岡県粕屋郡和白村に於ける含チタン砂鉄鉱床について。8p., 12図。
 314-93 SHIRAT 白土清太郎 (1949) 奈留島酸化鉄鉱現地報告書。17p., 3図。
 314-93 TANAKA 田中福実 (194?) 長崎県下県郡舟越村地内黒島鉱山調査報告。2p。
 314-93* WADA,T 和田利雄・井上秀雄 (1949) 長崎県南松浦郡奈留島村奈留島鉱山付近鉱床及地質調査報告。地調研資, no. 69. 4p., 1図。
 314-93 2 (不詳) (1943) 長崎県東彼杵郡川棚鉱山坑内外図。6図。
 314-93 2 (不詳) (1942) 彼杵鉱山説明書。7p., 3図。
 314-94* INAI,N 稲井信雄 (1956) 小国鉱山概査報告。地調研資, no. 70. 7p., 2図。
 314-94 HARADA 原田種成 (194?) 熊本県菊池郡河原村菊池川上流 (藤田一塚原) の砂鉄について、概査。3p., 1図。

第5図 対象別索引の一部

本所のオープンファイルに登録された資料は、分類コードに*印が付けられている。

第3表 資料の対象別ベスト10

順位	コード	対 象	件 数
1	351	石炭・亜炭	189
2	314	鉄・(含銅)硫化鉄	44
3	370	水資源	43
4	500	環境地質	32
5	355	ウラン・トリウム	28
6	339	石灰石・ドロマイト	25
7	311	金・銀	22
7	356	地熱・温泉	22
9	300	鉱床・地下資源全般	21
10	344	窯業原料・粘土	19

5) 鉱石：産状・鉱石内容・品位。

6) 鉱業：既生産量・確推定埋蔵鉱量。

7) 石炭：kg当りカロリー数。

実際の報告書から上記の情報を読み取るには、しばしば困難があった。中には他人に読まれることを、ほとんど意識していないかのような、あいまいな記述もあった。極端な例では、「どこに」「何が」という必要最小限の事項が判然としないため、要約作成の段階でボツになったものもある。なるべく具体的な数値を記そうと、化学分析値などが多数ある場合には、その平均値を求めた。

抜粋された資料が、研究資料集第62～117号に登録された。筆者が作成した「地質調査所九州地域地質センター研究資料の総索引1988」も同119号となった(地質調査所月報, 第40巻第3号, 1989)。

7. 資料が語る九州の戦中・戦後史

今回整理した資料の索引を眺めると、さまざまな興味ある事実が読み取れる。

まず対象別件数のベスト10を見ると、調査対象は石炭が圧倒的に多かった(第3表)。これは九州の主要鉱業が石炭であったことを物語る。地域別に見ても、第1位の福岡、第2位の長崎、第5位の熊本各県は、それぞれ筑豊・佐世保・天草の各炭田に対応する。

ちなみに第3位の鹿児島県は金・銀・(硫化)鉄・温泉を主とする。また第4位の宮崎県は、天然ガスが特徴的だが、一般地質から応用地質までの分野が、満遍なく散らばっている(第4表)。

以上を概観しても、九州地方の地質の特色が、よく反映されているように思う。

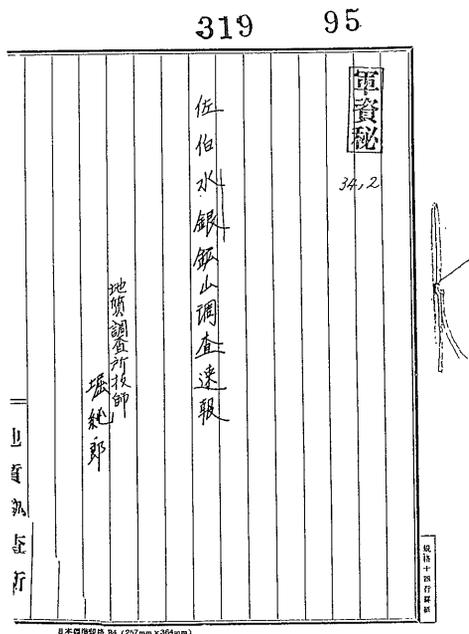
1990年2月号

第4表 資料の地域別ベスト10

順位	コード	地 域	件 数
1	91	福 岡 県	162
2	93	長 崎 県	98
3	97	鹿 児 島 県	78
4	96	宮 崎 県	62
5	94	熊 本 県	54
6	92	佐 賀 県	51
7	95	大 分 県	38
8	90	九 州 全 域	35
9	10	日 本 全 土	12
10	99	そ の 他	5

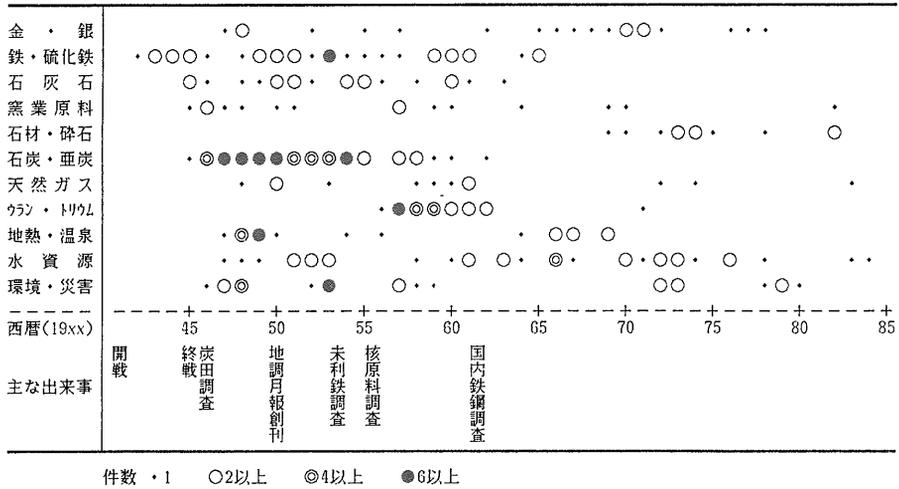
歴史的背景を考慮しながら、個々の報告書を眺めてみるのも興味深い。太平洋戦争中の報告書には「軍資秘」などの文字も見られる(第6図)。それらの序文を読むと、地質や地下資源の調査目的は、時勢を反映して「戦争遂行のため」であった。

筆者は、調査研究の時代的な推移を、少し定量的に調べようと、自作の BASIC プログラムと MS-DOS によるデータの並べ換え作業とを組み合わせ、索引のデータを基に、年代ごとの対象別資料数を集計した(第7図)。



第6図 戦時中の報告書

「軍資秘」の文字が蔽めしい。



第7図 主要研究対象の年度別資料件数。作成年不明のものは除いてある。

その結果、資料の数が爆発的に増加したのは敗戦直後の1947年で、「国土復興のため」に炭田調査が始まった時期と一致する。前にも述べた通り、印刷事情が極めて悪く、手書きの報告書がこの時期に最も多かった。

異色だったのは、1949～50年に地質調査所福岡支所（当時）から発行された「地下資源案内」第1～5号である（研究資料集、第65号）。更半紙に謄写印刷された新聞形式で、九州管内の地下資源調査のニュースや、解説記事が掲載されている。

その最終号には「近く地質調査所月報が創刊されるので、今後はそれに譲る」という意味の、閉刊の辞が書かれている。調査研究の成果を何とか公表したいという、福岡支所の意気込みが読み取れる。ちなみに地質調査所月報は1950年に創刊された。

石炭調査の開始とほぼ同時に、鉄・含銅硫化鉄鉱の調査報告も増加し、それが未利用鉄資源調査と国内鉄鋼原料調査（1960年代後半）へ引き継がれる。石灰石・ドロマイトの調査も鉄鋼原料調査の一環として行われ、この時期に多くの報告が書かれている。

このように当時、我が国の基幹産業であった製鉄を、地質調査所が資源的側面から支えていた様子が、よく伺い知れる。

核原料資源調査の実施に伴って、1956～62年にウラン・トリウムの報告書が集中する。

ところで、この種の報告書は、放射能異常の認められたものだけが地質調査所月報に掲載を許され、それ以外は、単に抄録だけが公表された。その場合は抄録の執筆者が著者となり、原著者は表に出なかったようである。

九州地域地質センターにも、このような報告書が見出された。地質・鉱床・鉱石の記載などに関しては、内容

的にいささかの遜色がないにもかかわらず、今回発掘されるまで、黙殺される形になった。調査者の苦労と莫大な研究費との結集が、陽の目を見ないまま長年放置されたのは、誠にもったいない話ではある。

このほか、1960年代末から石材・砕石の調査が行われるようになった。このように九州地域地質センターでの主要な調査研究の対象は時代とともに変遷してきた。

おわりに

筆者は、紙質の悪い手書きの報告書を読むにつけ、少年時代に体験した大戦末期から敗戦直後の光景がよみがえった。

戦争に敗れて、すべてを失ったかに見えた我が国にあって、ものすごいインフレと食糧難や物資不足の逆境にもめげず、国土の復興を目指し、地下資源調査に果敢に取り組んだ地質調査所マン達のファイトに、圧倒される思いである。

今回整理した資料は、たしかに玉石混交ではある。だが、九州の地下資源に限っても、例えば筑豊地区の石炭鉱山は1960年代後半には絶滅したし、現在は金属鉱山も壊滅状態にある。

となると、「ここにこんな物があった」という古文書の記録さえも、いまや貴重品になっている。将来、学問の進歩や時代の推移に伴って、これらのデータがどんな形で役立つかも分からない。今回の原田氏および筆者の「奮戦」の意義が、地下資源の研究に携わる諸氏には、理解していただけるものと思う。

<受付：1989年9月20日>